

# 社会的世界とアイデンティティ

椎野 信雄

## 1. アイデンティティの探究

### 1.1 アイデンティティ・クライシス

「自分は何者であるのか」、「自分とは一体何なのか」、「自分は誰であるのか」、「自分とは何をしている者なのだろうか」、「ほんとうの自分とはどういうものなのか」、「自分はどんな人間になれるのか」、「自分はどのような社会的役割を果すべきなのか」、……。社会的存在者として生きている人々(近代人)は、時に、このような疑問を発する。このような「自分は何か」(What am I?)とか「自分は誰か」(Who am I?)とかいう問題は、今日、アイデンティティ・クライシス(Identity Crisis)の問題として定式化されている。アイデンティティの問題をその中心的主題として独自の精神分析的自我心理学を理論化している人として、我々は、U.S.アメリカ人の臨床医(精神分析学者)E.H.エリクソン(Erik Homburger Erikson)(1902年ドイツ生れ)を知っている。このような「自分は誰か」とか「自分は何か」という問題意識を持って、このエリクソンに接近してゆき、何らかの答えを見い出そうとした人達は、多いにちがいないだろう。だが、必ずしも、そのような人達は、そこにおいて満足のゆく答えを見い出すことができなかつたのではないのだろうか。もちろん、何らかの有益な答えをそこにおいてつかんだ人達もいることも事実であろう。このエリクソンのアイデンティティの理論は、臨床場面においてのみならず、1960年代のU.S.アメリカにおけるさまざまな社会(市民権)運動の(特に青年たちの)心理的核心として重要な役割を果してきたものとして(一部の人々に)注目されてきている。<sup>(1)</sup>さらにそれは、単に運動のための心理的支柱としてだけではなくて、社会諸科学における一つの理論としてさまざまな影響を与えてきていた(いる)ことも事実である。<sup>(2)</sup>だが、そうであるからこそ、人はそこにおいて何か微妙なズレの感覚を持たざるを得ないのではないのだろうか。このアイデンティティの問題が、近代人にとって、どうでもよいものではなくて、まさに重要なものであるが故にである。

### 1.2 エリクソンのアイデンティティ論

E.H.エリクソンは、アイデンティティという概念を中心として、人間発達(精神・社会的エピジェネシス(epigenesis)〈漸成的発達〉)の八人生段階説〜ライフ・サイクル論〜を構築した。そしてこの中において、アイデンティティは、絶えざる分裂と統合(危機と克服〜解決課題の解決の成功と失敗)を繰り返し、生涯を通して問題化され、各発達段階を成長してゆくものとして考察されている。そして特に、個人の生活史が社会全体(共同体)の歴史と出会う段階として「青年期」を捉え、その解決課題をアイデンティティの確立とし、その失敗をアイデンティティの混乱(拡散、葛藤-危機)として、彼の発達論の中心に据えたのであった。彼は、このようなアイデンティティ

イの確立を中心的課題（危機あるいは克服）とする「青年期」を、人が大人の任務につくための（心的）モラトリアム（猶予期間）とし、さらに、アイデンティティの拡散する症候を、臨床事例として、あるいは、歴史的人物の事例研究（心理・歴史的アプローチによる伝記的生活史）—ルター<sup>(3)</sup>、ガンジー<sup>(4)</sup>、ジェファソン<sup>(5)</sup>、ヒットラー、ゴーリキー<sup>(6)</sup>、ショウ<sup>(7)</sup>、フロイト、ダーウィン<sup>(8)</sup>、ジェームズ<sup>(9)</sup>など—として、さまざまに記述したのである。

このアイデンティティの理論は、エリクソンという一つの生活史を生きている人格のなかから展開してきたものであり、彼の出生、幼児期、少年期、青年期、成人期の生い立ち、移住、時代背景、社会状況、文化環境などを考慮に入れて理解しなければならないものである。そうすることによって、人々は、エリクソンという人が、絶えず根こぎにされた自己の故郷と定住地を希求している理論家であることを見い出すであろう。そしてさらに、人は、このアイデンティティというものが（特に近代人にとって）中心的課題であるということも見い出すであろう。エリクソンは、人間にとってアイデンティティというものが不可欠なものであることを次のように述べている。「人間が生存する社会というジャングルの中では、自我アイデンティティの感覚なくしては、人は生きているという感覚をもつことができない。」<sup>(10)</sup>あるいは「各人は、自らの存在の潜在能力を充分に実現させるためには、歴史の一定期間内の、特定の地理的場所における、与えられた共同体の中の、限定された一人間としての発達というかけがえのない事実を、…何とか統合しなければならない。」（(4)邦訳Ⅱ, PP. 57-58）また「社会は、その成員を現在の彼となるべく運命づけられた一人の人間として認め、他方、彼はそのような人間となることにより社会から当然のものとして認められる。」（(7)邦訳 P. 149）とも述べている。そしてさらには、「現在においては、アイデンティティの研究が、フロイトの時代における性愛の研究と同じくらい戦略上重要なものになっている。」（(10) P. 274）とまで述べているのである。

だが、このように重要であるアイデンティティという概念は、多義的であり、多元的であり、どことなくあいまいであり、捉えがたい。<sup>(11)</sup> エリクソンも「この主題について書けば書くほど、この言葉は、総括的で不可解な何物かをさす術語になってしまう。」（(9)邦訳 P. 1）と述べている。彼によれば、アイデンティティという概念は、さまざまな文脈のなかで、その「危機」や「喪失」において、その不可欠性を指し示すことができるものなのであり、それ以外に、それを探究することはできないものなのである。そして、それゆえ、彼はさまざまところで、この概念の定義を述べているが、それは、「自分が他ならぬ自分として、生き生きとした生命的存在として生き続けているという実存的な意識であり、同時に、自分が所属する社会の人々とある本質的性格において共通しており、世界との一体性をもつという実感である。」（6）あるいは、「このアイデンティティという言葉は、自己自身の中の永続的な同一（自己同一）という意味と、ある種の本質的な性格を他者と永続的に共有するという意味の双方を暗示するような相互関係を表わしている。（「個人的な同一性の意識的感覚」「個人的な性格の連続性を求める無意識な志向」「特定の集団の理想と同一性との内的な「一致」（連帯）の維持」）（(7)邦訳 P. 132）あるいは、「アイデンティティとは、個人の核心、さらにまた、彼の共同体文化の中核に『位置する』一つのはたらきであって、まさにこれら二つのアイデンティティズ（同一性）のアイデンティティ（一致）

を確立するはたらきである。」(4)邦訳Ⅱ, P. 56) つまりは、アイデンティティとは、共同体(集団, 他者)と共有され、一致した自己の意識の一貫性, 斉一性(まとまり)の感覚のこのようである。

### 1.3 自我アイデンティティと自己アイデンティティ

さて、エリクソンによれば、このような人間のアイデンティティは、自我アイデンティティ(Ego Identity)と自己アイデンティティ(Self Identity)とから成り立つものであるようである。「自我の総合化力をその中心的な心理社会的機能に照らして論議するとき、ひとは自我アイデンティティについて語りうるのであり、また、個人の自己イメージと役割イメージとの統合を論議しているとき、ひとは自己アイデンティティについて語りうるのである。」(9)邦訳 P. 296)そして、エリクソンのアイデンティティの理論の中心概念は、自我アイデンティティなのである。ところが、エリクソンの理論自体のあいまいさ(難解さ)もあるが、エリクソンのアイデンティティ論が注目される時、この自我アイデンティティというよりもむしろ自己アイデンティティの方がアイデンティティの中心として考察されてしまっているようである。特に、エリクソンのアイデンティティの理論を、何らかの形で、社会(心理)学化する時に、その傾向が著しいようである。アイデンティティというものを、何らかの形で、「社会」というものに合わせたいとき人は、その自己アイデンティティに注目するのである。<sup>(12)</sup>アイデンティティの問題に関して言えば、自我アイデンティティよりも自己アイデンティティの方が捉えやすいからでもあろうが、だが、エリクソンのアイデンティティの問題の核心は、まさに自我アイデンティティの方にあるのである。(吉田民人も指摘するように)<sup>(13)</sup>自我アイデンティティとは、社会的に(他者によって)共有された、価値関与的・統合的意識作用の一貫性の感覚であろうし、それに対して、自己アイデンティティとは、没価値的・意識対象であるところが自我アイデンティティとは異なっているのであろう。そして、エリクソンのアイデンティティの理論の中心問題は、この自我アイデンティティを捉えない限り、いくら自己アイデンティティの問題の解決を積み重ねていったとしても解決され得ないであろう。エリクソン自身も、彼のアイデンティティの理論の中心問題は、自己アイデンティティではなくて自我アイデンティティであると注目してはいるものの、必ずしも、明確にそのことが彼の理論的考察の中心とはなっていない嫌いがある。(エリクソンにとって、アイデンティティの確立とは、自分が属する社会において、どんな(社会的役割を果す)人間になるべきであるかを決定することとになってしまっているのである。)<sup>(14)</sup>

さて、人は、G. H. ミードの自我論<sup>(15)</sup>にならって、自我アイデンティティを「I」として、自己アイデンティティを「Me」として述べることができるであろう。(ミードにとって「Me」とは、他者の構え(役割)の組織化されたセットであり、「I」とは、この「Me」に対する行動であり、「Me」を再組織化するものなのである。)そして、ここでは、この「I」≡自我アイデンティティを主語的アイデンティティとそして「Me」≡自己アイデンティティを客語的アイデンティティと呼ぶことにする。アイデンティティのうちで、主語的アイデンティティとは、自己を対象化する自分というものであり、通常、言語的には、主語(主格)として表現されるものであり

また、客語的アイデンティティとは、対象化された自分というものであり、言語的には、客語(目的語)として表現されうるものなのである。

#### 1.4 何がアイデンティティか。(What is I ?)

このようにアイデンティティを捉えかえすことによって、アイデンティティの概念を再考してみることになろう。通常、アイデンティティの問題は、「自分は誰か」(Who am I ?)とか「自分は何か」(What am I ?)とかいう疑問で、主題化・定式化されることが多いが、アイデンティティの問題の見えざる落とし穴は、案外この出発点にあるかもしれないのではないのだろうか。そこでは、必ず、主語であるIにたいする述語が疑問に問われているのである。疑問にされているのは、I am ~にたいする補語(あるいは目的語)なのである。主語であるIそれ自体には、何ら疑いが向けられないで、それは、絶えず主語の位置にあるのである。そこで問われているのは、アイデンティティのうちの客語的アイデンティティなのである。だが、アイデンティティの問題でより重要なのは、この常に主語の位置にあるIなのではないのだろうか。主語的アイデンティティを中心的に問わなければ、アイデンティティの問題は、解決しえないであろう。(エリクソンのアイデンティティ理論も、この主語的アイデンティティを探求していると捉えられるであろう。)だが、実は、問題は更にこの先にあるのではないのだろうか。主語であるIでも捉えられないアイデンティティが、アイデンティティの問題の隠れた根源的基層にあるのではないのだろうか。言語的に表現可能な、客語的アイデンティティや主語的アイデンティティでもない、言語的には捉えられない根源的なアイデンティティが、まさに問題であるがゆえに、それにひきつづき、主語的アイデンティティや客語的アイデンティティも問題になるのではないのだろうか。それゆえ、アイデンティティの問題として、主題化すべきは、主語であるIを前提とした客語的アイデンティティだけではなく、また、言語的に表現可能である主語的アイデンティティどまりでもなく、更に根源的には、主語であるIですらないアイデンティティなのではないのだろうか。アイデンティティの問題とは、「自分は誰か」(Who am I ?)や「自分は何か」(What am I ?)だけではなく、「何が自分か」(What is I ?)をも問うことであり、また言語的に対象化可能である自分というもののアイデンティティ(客語的アイデンティティや主語的アイデンティティ)だけでもなく、もう一度、根源的にアイデンティティを問い直すところから出発しなければならないのではないのだろうか。この言語(主語、客語)になりえないアイデンティティとは、何であろうか。自分≠アイデンティティとは何なのか。何が、自分≠アイデンティティなのであろうか。

## 2. 日常生活の世界の成立

いわゆるアイデンティティの自覚とは独立に、日常生活の世界というものは、人においては、一貫した確固たるものとして存在し、そうしたものとして理解し、解釈される現実としてあらわれているように意識される。日常生活の世界のなかで、人は、それを現実として自明なものとし、なし思考し行動している。そのような日常生活の世界は、人の存在や意識とは別個に存在し、人

は、既に出来上がった自明な秩序をもった世界に、その後から生み出されるように感じる。日常生活の世界を形作っているもの—自然、建物、住居、衣服、食物、道具、道路、その他諸々の事物—は、人にとって客観的なものとしてあらわれている。

この日常生活の世界は、さまざまな世界の存在のあり方のなかにおいて、最も特権的な地位を占めている。人は、世界というものを一つの現実ではなくて、複数の現実から成立しているものと意識しているが、その中でも、この日常生活の世界の現実を至高の現実（パラマウント・リアリティ）として意識している。人は、夢や映像や書物を見ている時は、それらを現実として意識しているが、それらの現実は、覚醒した日常生活の世界の現実の特権性によって、虚構（フィクション）の世界となってしまうのである。人は、この日常生活の世界を自明のものとしてみなして、自然的態度をもって、日常生活の世界のなかで生きている。

このような日常生活の世界は、人の存在や意識とは無関係に独立に存在し、人には、既に客観化されたものとして、強制されているものなのである。事物は、このような日常生活の世界においては、客観的な意味を与えられているように人に理解されているのである。この日常生活の世界の現実において、人の「空間と時間」〈ここと今〉〈そことその時〉は成立している。

さらに、日常生活の世界の現実には、自分の世界であると同時に他者と共に共有された世界としてあらわれているのである。日常生活の世界は、自分にとってと同様に、他者にとっても現実的なものなのである。人々は、自分とは異なったパースペクティブを持っているとはいえ、自然的態度をもって、一つの共通した世界を見ている他者と共にその日常生活の世界のなかに住んでいるのである。

このように日常生活の世界は、至高の現実として、自明な強制的な客観性として人々において存在しているのである。そして日常生活の世界の現実以外の現実には、限定された意味の領域として人々の意識にあらわれるのである。日常生活の世界は、時間と空間によって構成されているが、それらは、共有された、社会的な客観的な構造を有していると意識されるのである。そのような客観的な構造のなかで、人々の日常生活の世界は営まれていると理解されるのである。

つまり、日常生活の世界の現実には、人々の存在や意識とは独立に、明確な自明な秩序をもって客観的な性質を帯びて、確固たるものとして既に存在している現実であり、限定された意味の領域をみつめる至高の現実である。それは、自然的態度において、疑いを拒否された特権的な地位を占めているのであり、また、自分の世界であると同時に他者たちの世界でもあり、それは他者と共に共有された世界であり、人々の間に成立するところの共有世界なのである。日常生活の世界のなかの事物は、自分にとってと同様に、他者にとっても（その事物に対する意味は、時に、人によって異なっていようと）世界の一部としてあらわれるのである。その事物は、他者の日常生活の世界をも構成しているのである。

さらには、共有された日常生活の世界において、事物は、人にとって操作可能なものとして触れることができるものとしてあらわれる。この操作可能性のためにも、日常生活の世界は、客観的に構成されているものとしてあらわれるのである。このように、日常生活の世界は、人々において、共有性や操作可能性のゆえに、強制的に確固たる至高の現実として、客観性を帯びて、自

明なものとして成立しているのである。<sup>(16)</sup>

### 3. 社会的世界と自分

自分≡アイデンティティとは何かを問うことに戻ろう。人は、日常生活の世界のなかに住んでいる。つまり、そこは他者と共有された世界が成立している場所である。他者と共有した世界のなかに住むということは、人はそこにおいて自分は他者と異なった自分であるという自覚が成立している世界であるということである。では、自分は他者ではなく自分でありながら他者と共有された世界に住むことは、いかにして可能なのだろうか。自分を他者から区別しながら、他者と共有していることは何であろうか。自分は自分でありながら他者と交わり、関係を結ぶとはどういうことなのだろうか。

このような問いに答えるためには、自分の個我（≡コギト）から出発したのでは解決できないであろう。そのためには、自分と他者とがそこから導き出されてくることの根源的な世界に立ち返らなければならないであろう。そこは、自分も他者もいまだ区別されず、分離されていない世界である。そこでは、自他が未分化で融合している。この根源的世界では、他者と自分とが分節されておらず、区別がなく、それらが一体視され、融合しているのである。そこは、自他の未分離な、自即他であり他即自であるという自他の源泉的な同一性が成立している世界なのである。このような世界を（木村敏にならって）「気の領域」と名づけておこう。それは、「（精神とか心とかのように身体と対立的に考えられるのではなく、身体そのものの底にあって、しかも身体のように個別的な死を含んだ歴史的なものではなくて）自分のことが自分のことでありながら同時に相手のことであり相手のことがそのまま自分のことでもあるような領域<sup>(17)</sup>」である。（日本語の「気」とは、赤塚行雄も指摘するように、<sup>(18)</sup> 外に向かって一種の目にみえない触手のように動いているものなのである。それは、自己の内にあるものでも、他者（≡他物）のなかにあるものでもなく、まさにそれによって自己の内とか外の他者といったものが成立してくるものなのである。ここではとりあえず「気」とは外へ向かう作用であるにとらえておこう。ただし、外へ向かうといっても、何らかの「内」（≡自己）というものが初めにあってそこから外へ向かうといったものではなくて、逆に「気」の作用があることによって「内」というもの、そこから二次的に成立してくるようなものなのである。）

このような「気の領域」は、共有世界として成立している日常生活の世界の源型であり、そこから意識の対象化を経て、自分と他者の（自覚的な）区別関係が析出されてくる世界なのである。またそして、「気の領域」から析出されてきた自分や他者が、この日常生活の世界という共有世界を成立させているのである。このように自分とは、まずもって何か自分以外の外部的なものを自己の内部に内面化することによって生じてくるものではなくて、自他未分化な、自他の分離していない、自他の融合している「気の領域」（自他の同一性）から、外へ向かう気的作用によって、そこに気の対象としての他者なることが生じ、その他者ではないところの自分ということが生じ、そこから自己自身であるところの自分というものの対象化も生じてくるのであり、自分と

他者とを区別し、対象化する共有世界も成立してくるのであろう。(ただし、今述べた順序は論理的なものであり、時間的には他者と自分の成立は同時である。) この源泉的な「気の領域」から自分と他者が析出され、そのように析出されてきた自分や他者たちによって成立する共有世界のことを、社会的世界と呼べるであろう。社会的世界とは、「気の領域」から析出されてきた自分や他者たちが再び統合されている世界である。

どのような社会的世界が成立するかは、自分や他者が析出されてくるところの日常生活の世界によって異なっているであろう。日常生活の世界は、社会的世界(共有世界)において成立しているが、同時に、社会的世界は、日常生活の世界においてその実現が決定されているのである。自分というものが「気の領域」からどのように析出されてくるのかは、それが析出されてくるところの日常生活の世界によって異なるであろう。また日常生活の世界は、異なった社会的世界においては、異なった現われ方をするであろう。このように、日常生活の世界と社会的世界とは、相互媒介的な関係にあるのである。日常生活の世界が異なっていれば、社会的世界も異なってい、社会的世界が異なっていれば、日常生活の世界も異なっているのである。自分というものは、源泉的な「気の領域」における自他融合の潜在形が、日常生活の世界のなかにおいて、社会的世界として成立しているところの共有世界のなかの一成員(メンバー)として自己実現されるのである。社会的世界のなかの自分というものは「気の領域」から析出されて、日常生活の世界において成立しているのである。

#### 4. 日常言語と日常生活の世界

根源的な「気の領域」から自分というものが析出されてくるのに、中心的な役割を果たすものは、日常言語であろう。日常言語は、日常生活の世界を分節化し、組織化する機能を有し、社会的世界の共有性を成立させるために重要な役割を果たしているのである。日常生活の世界を分節化し組織化する機能をもつ日常言語は、社会的世界において「気の領域」から自分や他者を析出し、そのような社会的世界に人々を再組織化すべき手段であり、日常生活の世界は、そういうものとして日常言語を有しているのである。日常生活の世界のなかの事物が分節化され、成立するために日常言語が中心的な役割を果たしている。「気の領域」から自分というものを析出してくる人々にとり、日常言語は、日常生活の世界を分節化し、組織化し、再組織化するために最も重要な中心的な機能をもつものである。社会的世界とは、同じ日常言語を有し、同じように分節化、組織化された日常生活の世界を共有している自分や他者たちによって構成されている世界なのである。

日常生活の世界の成立は、日常言語と密接に絡み合っているのである。「気の領域」から析出されてくる自分というものは、自分を「気の領域」から析出させたところの日常言語を共有する他者たちと、まさにその日常言語によって結ばれて社会的世界を成立させ、そうして根源的な「気の領域」をこのような社会的世界に再組織化しているのである。「気の領域」から自分というものが析出されてくることと、社会的世界が組織化されていることと、日常生活の世界におい

て日常言語が成立していることとは、それぞれ相互に媒介連関していることなのである。日常言語が日常生活の世界を分節化し、そのような日常生活の世界において日常言語によって「気の領域」から自分や他者が析出され、そのような自分や他者は、社会的世界において日常言語によって再組織化されて、結びつけられているのである。自分や他者が「気の領域」から析出されてくるのは、日常生活の世界においてであり、そのような自分や他者たちが社会的世界に結びつけられるのも、日常生活の世界においてである。日常生活の世界の成立は、日常言語による分節化であり、社会的世界の成立である。

たとえ、人々が日常言語において分節化、組織化された事物以外のものを日常生活の世界のなかにおいて見出し、見出しているようにも、そのことは、日常生活の世界や社会的世界が成立していることと対立するものではない。人々は「気の領域」から自分というものを析出され、そこで日常生活の世界と出会い、日常言語に出会っている。そこにおける日常生活の世界や日常言語は「気の領域」から分節化されてきた自分や他者を社会的世界へと再組織化するのに中心的な機能を果たしているのである。社会的世界においては、日常生活の世界は、人々にとって同じ様に成立しており、日常言語は、同じ様に分節化されている。日常言語は、「気の領域」から析出してきた自分というものを統制し、社会的世界を統制し、日常生活の世界を統制している。また、自分や他者たちによって成立している社会的世界は、日常言語を介することによって、日常生活の世界を統制している。人々は、日常言語によって、日常生活の世界を分節化し、それによって社会的世界が成立しているが、そのことは同時に、「気の領域」から日常言語による社会的世界への限定化をも意味しているのである。日常生活の世界の成立は、異なった日常言語においては異なった現われ方をし、社会的世界の成立は、異なった日常生活の世界や日常言語においては異なっている。自分というものは、異なった社会的世界、異なった日常言語、日常生活の世界においては、異なった析出のされ方をするのである。<sup>(19)</sup>

## 5. 抽象的社会と私的領域

ここでは、何故、近代人が同じように日常生活の世界に住みながらも、非近代人と異なって、アイデンティティの問題を主題化しなければならなくなったのかについて、多少考察してみることしよう。

社会的世界のなかに住む人々にとって、日常生活の世界の現実、自明な、共有された、特権的な現実として、至高の現実としてあらわれる。そして、それ以外のさまざまな現実、この至高の現実によって、限定された意味の領域としてあらわれることになるのである。だが、近代人にとっては、この至高の現実としてあらわれる日常生活の世界の現実も、一枚岩的な、単一な、画一的な現実としてではなく、多元的な、複合的な、多面的な現実としてあらわれざるを得ないのである。もちろん、日常生活の世界の現実が、それ以外の限定された意味の領域の現実—夢、空想、芸術、科学、狂気—と比較されるならば、特権的な、強制的な至高の現実であることには変わりがないのであるが。

さて、具体的社会（≡非近代社会）においては、人々は、自明な日常生活の世界の現実を具体的な現実として意識して、未分化な、画一的な、具体的な社会構造のなかで生きており、そこにおいて具体的な全体的な意味性をもって実践し、生活していたのである。人々は、一つの（閉ざされた、安定した、全面的な）コスモス（秩序世界）のなかに住んでいるのであり、自己を独自の個人（主観）とみなすという意識はなく、直接的にこの小宇宙の（それから分離しえない）分子であったのである。人々は、この小宇宙の世界のなかで自己の置かれている位置を知っていたし、日常生活の世界は、具体的な実用的な過程として成立していたのであり、人々は、この具体的社会のなかでは（具体的に）自由であったのであり、この社会を生きていたのである。この安定したコスモスにおいては、人々のアイデンティティは、自明なものであり、明確で安定し、問題とさえならないのである（アイデンティティは、それが問題として不在であるならば、人々において現実的なものであり、それが問題として現実的であれば、人々において欠けているのであろう）。

それに対して、抽象的社会（≡近代社会）においては、日常生活の世界の現実のなかにおいて、社会構造は、一枚岩的な、単一なものではなくて、多面的であり、多元的な領域に分節化されているものとして人々に意識されるのである。それは、公的な領域と私的な領域とに大きく分断されており、それぞれが自律化した領域となってしまうのである。それゆえ、ここにおいて日常生活の世界は、自明に（外的な）公的生活と（内的な）私的生活とに分化されているものと意識され、人々は、この二重の生活の世界を生きなければならなくなっているのである。日常生活の世界において、私的領域から見れば、公的領域は、強固な、中立的な、支配的なものとして現われ、公的領域から見れば、私的領域は、小さな、くつろいだ、保護的なものとして現われる。そして、さらには、公的領域は、さまざまな制度的領域（経済、政治、宗教、教育、文化等々）に再分化され（各領域内でも更に分化が繰り返され）、それぞれに自律化しているのである（また、ここでは、人々と自然環境との紐帯も、切断されてしまっている）。

多元的な（公的）制度的領域は、それぞれ人々を、一貫的に・全面的にはなく、部分的に（浸透的に）支配、統制している。それゆえ、人々は、それら以外に抽象的な社会構造から自律している私的領域を見出すことができ、そこを「自由の王国」として意識することもできるのである。近代社会の社会構造は、人々の意識において抽象的なものになっており、それゆえこの抽象的社会においては、公的領域から自律した私的領域を意識できるのである。

多元的に、自律化した制度的領域は、人々にとって分離されており、各ひとつひとつの（特殊専門的）制度的領域が、それぞれに自律的に、人々に部分的に影響を与えている。人々は、この多元的な制度的領域の間を動かなければならず、各領域において、さまざまな自律的な（抽象的）役割を身につけなければならないのである。そして、そこでは人々は、自己の位置が具体的に何であるのかを理解することが困難になるのである。このような抽象的社会に住む人々は、分断された公的領域（公的社会関係）においては、具体的・全体的な意味性を見出すことができず、辛うじて、私的領域（親族・家族・個人・内面）において、失われた具体的・全体的な意味性を見出そうとする（せずにはいられない）。だが、分断された私的領域においては、具体的・全

体的な意味性を見つけ出すことが困難なのである。こうして人々は、具体的な故郷を喪失し、アイデンティティの明確さ、確実さを意識できなくなってしまったのである。具体的・全体的な意味性の喪失は、人々からアイデンティティの保証のための具体的な基盤を奪い取ってしまったのである。抽象的社会において、人々は、アイデンティティを確立するのに重要な困難さに出会わなければならないのである。アイデンティティは、私的領域においてだけでも、公的領域においてだけでも確立されるものではなく、私的領域と公的領域との分離を越えて、日常生活の世界の全体的領域において、確立されねばならないのである。だが、日常生活の世界は、具体的社会から抽象的社会に変動してしまったのである。

それゆえ、人々は、全体的な意味性を概念的に探究し始めたのである。ここにおいて、アイデンティティの問題が、主題化されるようになったのである。アイデンティティとは何であろうか。何が、アイデンティティなのであるか。自分というものでもない根源的な自分≠アイデンティティとは何であろうか。<sup>(20)</sup>

## 6. 述語的アイデンティティと生世界

他者と区別される自分、他者ではない自分というものは、自分と他者とが未分化な根源的な「気の領域」から日常言語によって析出されてくるものである。社会的世界においては、自分と他者たちとは絶対的に区別されていると理解されている。自分というものは、他者ではなく自己自身であるところの自分というものである。まず、人々は、源泉的な「気の領域」のなかからそのつど他者たちを見出し、それと同時にそのような他者とは異なった自分を分節化してくる。だが、ここでの自分は、他者ということとは区別されてはいるけれども、いまだ自己の対象性は問われてはいないのである。そのように析出されてきた自分は、いまだ自己自身を対象化していない自分なのである。その後で、自分は他者と異なった、区別された自分というものを一つの連続性として対象化して初めて自分というものの自覚を見出すのである。そこにおいて、自分は、他者と区別された自分というものを同一性として意識するのである。その自分というものは、他者と自分とを区別するところに成立するのである。

源泉的な「気の領域」から析出してくる原初的な自分とは、他者から区別されて対象化された自分というものではなく、「気の領域」のなかから、常にその都度現われてくるところの他者ではないところの自分ということなのである。通常、自分とは、対象化して意識することができるもの、「自分」と名づけているものを自分であると思っているが、このように对象的に捉えられている自分というもの(客語的アイデンティティ)は、ここで言う自分ということではないのである。では、自分ということとは、対象化している、自分というものを考えている「ノエシス」なのであるか。いやそうではない。自分ということとは、このように自分というものを対象化し続ける永遠のかなたにあるような「純粹自我」ではないのである。この「純粹自我」は、主語にはなりうるものである(主語的アイデンティティ)。自分ということとは、主語にはなりえないのである。主語になりうるものは、自分ということではないのである。

この自分ということは、意識的な、対象的な、客体的な自分というものは異なって、「気の領域」のなかから世界ということが常にその都度開かれているということにおいて（のみ）成り立っていることなのである。この自分ということの同一性は、周囲の事態、世界（時間と空間）の連続性、恒常性、同一性ということにおいてのみ、それを通してのみ、間接的に自覚されることなのである。この自分ということ、直接的に対象的に（客語として、主語として）自覚することは、そもそも不可能なのである。この自分ということとは、その都度開かれる世界の述語的な表現をもってしてのみ、間接的にその成立が自覚されることなのである。逆に言えば、この自分ということの同一性がある初めて、その都度開かれる世界の同一性、連続性も自覚されるのである。自分ということは、世界の述語としてしか言い表わせないことなのである。このような自分ということの同一性のことを、ここでは、便宜上述語的アイデンティティと呼び、そして、それが開かれていることにおいてのみこの述語的アイデンティティの成立が間接的に表現される世界のことを、生世界と呼ぶことにする。述語的アイデンティティは、言語的には全くの無であり、生世界における述語的なことを通してのみ間接的に表現されることである。この生世界の連続性、同一性においてのみ、述語的アイデンティティは、自己の同一性を自覚することができるのである。

こうして、人々が、日常生活の世界や社会的世界において、自分が他者ではなくて自分というものであるためには、その根底において「気の領域」（自他の同一性）のなかから開かれてくる生世界ということにおいて、常にその都度現前してくる他者ではないところの自分ということ（述語的アイデンティティ）を獲得し、保持していなければならないのである。アイデンティティの根源的な問題は、この自分ということの同一性、連続性にあるのである。この自分ということ（述語的アイデンティティ）が分裂する時、生世界（時間・空間）の連続性、同一性は成り立たなくなるのである。述語的アイデンティティは、「気の領域」と社会的世界、日常生活の世界、日常言語が相互関連的に成立していることを支えている根源的な要なのである。アイデンティティの問題は、まず、この述語的アイデンティティを主題化することから、解決され始めなければならないのである。（この直接的には言語にならない述語的アイデンティティをどのように把握してゆくか、どのような記述のスタイル（文体）をとれば、それが可能であるかについても、今後の重要な課題として残されている。そして、筆者の個人的な見通しでは、この述語的アイデンティティを発掘し、主題化するために、日本語という日常言語は、データとして適しているように思われるのである。）

#### 〔注〕と〔文献〕

- (1) Coles, Robert, 1970, Erik H. Erikson, Atlantic Little Brown, (鐘幹八郎監訳, 1980, 『エリクソンの研究上, 下』ペリかん社)  
Keniston, Kenneth, 1965, The Uncommitted, Harcourt, Brace & World, (参照)
- (2) Mitscherlich, Alexander, 1964 Die Unfähigkeit zu trauern, Piper, (林峻一郎・馬場謙一訳, 1972, 『失われた恋哀』河出書房)

- Lifton, Robert J., 1967, Boundaries, Random House, (外林大作訳 1971, 『誰が生き残るか』誠信書房)
- , 1970, History and Human Survival, Vintage, (小野泰博・吉松和哉訳 1974, 『終りなき現代史の課題』誠信書房)
- Keniston, Kenneth, 1968, Young Radicals Harcourt, Brace & World, (庄司興吉・庄司洋子訳, 1973 『ヤング・ラディカルズ』みすず書房)
- , 1971, Young and Dissent, Harcourt Brace Jovanovich, (高田昭彦・高田素子・草津攻訳, 1977 『青年の異議申し立て』東京創元社)
- (以上エクリソンの影響を受けている主な研究者の著作のうち邦訳されているものの中から)  
(日本の社会学者としては以下参照)
- 栗原彬, 1967, 「歴史における存在証明を求めて」『思想』(11月号) 521.
- , 1973, 「存在証明の政治社会学へ」『思想』(5月号) 587.
- 草津攻, 1977, 「アイデンティティと社会」『現代社会学7』講談社.
- , 1979, 「心理社会的および心理歴史的方法の展開」『一橋論叢』(2月号) 460.
- , 1978, 「アイデンティティの社会学」『思想』(11月号) 653.
- (3) Erikson, Erik H., 1958, Young Man Luther, W.W.Norton, (大沼隆訳 1974, 『青年ルター』教文館)
- (4) E.H.E., 1969, Gandhi's Truth, W.W.Norton, (星野美賀子訳 1974, 『ガンディーの真理 I・II』みすず書房)
- (5) E.H.E., 1974, Dimensions of a New Identity, W.W.Norton, (五十嵐武士訳 1979, 『歴史のなかのアイデンティティ』みすず書房)
- (6) E.H.E., 1950, Childhood and Society, W.W.Norton, (草野栄三郎訳 1955, 『児童期と社会』日本教文社, 1963, Childhood and Society (2 ded.) W.W.Norton, (仁科弥生訳 1977, 『幼児期と社会 I』1980, 『幼児期と社会 2』みすず書房) (9章, 10章)
- (7) E.H.E., 1959, Identity and the Life Cycle, International Universities, (小此木啓吾訳 1973 『自我同一性』誠信書房) (第3部第1章)
- (8) E.H.E., 1964, Insight and Responsibility W.W.Norton, (鐘幹八郎訳 1973 『洞察と責任』誠信書房) (第1章)
- (9) E.H.E., 1968, Identity, W.W.Norton, (岩瀬庸理訳 1969, 『主体性』北望社, 岩瀬庸理訳 1973, 『アイデンティティ』金沢文庫) (第4章)
- (10) (E.H.E., 1965, Childhood and Society, Penguin Books, p.232.) (あるいは, (7邦訳 p.112))
- (11) E.H.E., 1966, (栗原彬訳 「自我の正体を求めて」高橋徹編, 1968, 『組織のなかの人間』平凡社) および(9)
- (12) ここでは, 精神医学者や臨床心理学の諸論文を念頭においている。  
小此木啓吾, 1972, 『自我と社会の出会い』日本教文社  
———, 1978, 『モラトリアム人間の時代』中央公論社

- 編, 1974, 『アイデンティティ』 (現代のエスプリ No.78) 至文堂
- , 小川捷之編 1980, 『臨床社会心理学 1,2,3』 至文堂
- 福島章, 1979, 『対抗同一性』 金剛出版
- 1972, 『教育と医学』 (20-1) 慶応通信
- 鐘幹八郎, 上里一郎編, 1979, 『自我同一性の病理と臨床』 ナカニシヤ出版
- (13) (1977, 『現代社会学7』 (4-1) 講談社 PP.59~62)
- (14) (上記以外のエリクソンの著作で邦訳されているものとして次のものがある。)
- Evans, R. (ed) 1967, Dialogue with E.H.Erikson, Harper and Row, (岡堂哲雄訳, 1971, 『エリクソンとの対話』 北望社, 1975, 金沢文庫)
- E.H.E & Newton, H.P. 1973, In Search of Common Ground, Rikan (近藤邦夫訳, 1975, 『エリクソンV.S. ニュートン』 みすず書房)
- (15) Mead, G.H. 1934, Mind, Self and Society, University of Chicago, (稲葉三千男, 滝沢正樹, 中野収訳, 1973 『精神・自我・社会』 青木書店)
- (16) Berger, P.L. and Luckmann, T. 1966, The Social Construction of Reality, Doubleday, (山口節郎訳 1977, 『日常世界の構成』 新曜社)
- Schutz, A. 1962, Collected Papers, Vol. I, The Hague, Nijhoff,
- 山岸健, 1977, 『社会的世界の探究』 慶応通信
- , 1977, 『日常生活の社会学』 日本放送出版協会
- 村上陽一郎, 1979, 『科学と日常性の文脈』 海鳴社 (以上参照)
- (17) 木村敏, 1970, 『自覚の精神病理』 紀伊國屋書店 (P.163), 1978, (新装版)
- (18) 赤塚行雄, 1974, 『「気」の構造』 講談社 (P.18)
- (19) (16)村上, 参照)
- 以上で「気の領域」, 「社会的世界」, 「日常言語」, 「日常生活の世界」のそれぞれの関係, 相互媒介的關係については理解ねがえたと思うが, さらに, その綿密なる内的関連の有様については今後の課題となっている。
- (20) Zijderveld, A.C., 1970, The Abstract Society, Doubleday, (居安正訳, 1976 『抽象的社会』 ミネルヴァ書房)
- Berger, P.L., Berger B. & Kellner H., 1973, The Homeless Mind, Random House, (高山真知子, 馬場伸也, 馬場恭子訳, 1977, 『故郷喪失告たち』 新曜社) (参照)
- (21) (17)参照)

(しいの のぶお)